

英語科編 4

第104号

平成21年10月15日

4 日本人・ユダヤ人、同じ祖先？

佐伯 好郎 広島県出身在職300339

東高師教授 広島県廿日市町町長

日本人の祖先がどこからやってきたのか、天皇家の祖先はどこからやってきたのか、という問題は、日本の古代史の大きなテーマの一つですが、その学説の一つに、「日ユ同祖論」というものがあります。すなわち、日本人の祖先はユダヤ人であり、旧約聖書に登場する「失われた十支族」の未裔などであるとする考えです。

この説は、一見突拍子もないような考えに思われるかも知れませんが、現在も古代史では大きな影響を与えている説です。この考えを真面目にしかも学問的にも論証しようとしてキリスト教・中でも古代中国で「景教」と呼ばれたキリスト教について研究し、この分野における世界的權威となった学者が、佐伯好郎です。

佐伯は、広島県に生まれ、東京専門学校(現在の早稲田大学)に学び、その後渡米し、カナダのトロント大学で言語学を学びました。帰国後、早稲田大学で正宗白鳥などに英語を教えていましたが、矢田部良吉に乞われて東高師に移りました。しかし、尊敬していた内村鑑三の要請で、内村が校長をしていた独立女学校(現在の精華学園)の教頭になりました。

そのころの生徒としては、鳩山一郎がおり、次のような話があります。「素朴な佐伯があまり上等でない洋服を着て、古びた表紙の『ナショナル・リーダー』の4巻をたずさえて教場に入ってくるのを見て、3年生の鳩山一郎は「今度の先生はコックみたいだね」と言っていて皆を笑わせた。若い佐伯はかっと怒り、鳩山は1週間か10日の停学処分に出せられた」(『ある英文教室の100年』)。また、増田綱(早大教授・16回)の思い出によれば、「齒切れのよい、少し乱暴とも思われるような率直な言葉遣いでの授業に、初めは一寸驚いた」ということです。

しかし、佐伯の英語に関する考えは、英語ができるだけではないけない、

何かライフワークになる専門が目的であって、英語は手段にすぎない、というものでした。そのため、日露戦争がはじまると、附属中学を辞め、『軍国画報』の編集に努力し、さらに、中国やヨーロッパを旅行し、キリスト教の研究をし、『景教碑文研究』(碑文中国にキリスト教が伝わったことを示す著名史料)などを著しました。そして、今も附属中学のグラウンド正面に建っている「東方研究所」(現在の拓大国際会館)で研究を続けました。そして、戦後には、郷里に帰り、広島県の廿日市町長になりました。

ところで、「日ユ同祖論」は、戦後、佐伯の弟子であった江上波夫(附属小卒・東大教授で文化勲章受賞)に受け継がれ、戦後最大の天皇起源論争を呼んだ「騎馬民族王朝説」(日本の天皇家の祖先は、ツングース系の騎馬民族が、朝鮮から渡来し、天皇家になったとするもの)を生み、現在も支持する学者が多くなる学説となつていきます。ちなみに、江上も佐伯も日本にキリスト教が伝わったのは、奈良時代のころと考えているようです。

佐伯好郎著『佐伯好郎遺稿並伝』大空社(復刻版1996(山口・未見) 同著『景教の研究』東方文化学院 昭和10(山口・未見) 同著『支那基督教の研究 全4冊』春秋社 昭和19 番外 日本美の再発見

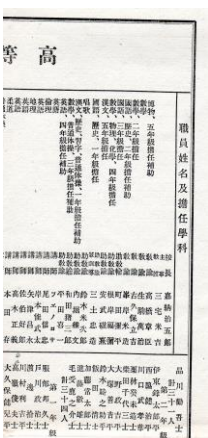
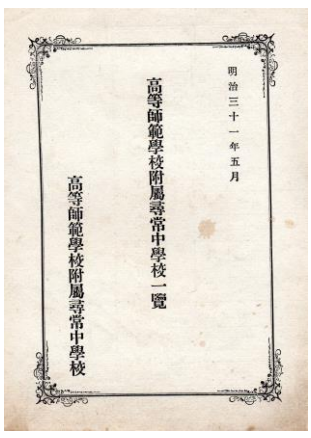
フェノロサ 在職 明治31

明治維新の文明開化・欧化主義の風潮の中で、お雇い外国人の一人として来日し、岡倉天心(教員NO28)岡倉田二郎の兄らとともに日本美の再発見に努め、また、日本文化を世界に知らしめた人物としてフェノロサがいることは、中学校の教科書にまで載せられている著名なことだと思えます。しかし、フェノロサが、附属中学の、今で言えばA・L・Tを勤めていたことはほとんど知られていません。

そもそもフェノロサは、明治11年から19年まで、東大で哲学を講じていましたが、日本の古美術の研究をするとともに、岡倉天心らと日

本画の復興に努力していました。そして、明治19年にヨーロッパに派遣され、アメリカに帰った後は、ボストン美術館に勤めていました。しかし、日本への想いからそこを辞め、40歳半ばで再来日しましたが、仕事がありませんでした。それを見て、かねてからフェノロサを知り、かつ尊敬もしていた嘉納治五郎が東高師の講師として迎え、附属中学でも教えることとなりました。彼は、4・5年生で英会話や英作文を教えましたが、当時の生徒であった石黒忠篤(戦後の農林大臣・10回)は、「あいつは英文法の定義を暗誦させるのが好きでね、定義を覚えていないと、ひどい目にあうんだ。」と述べています。また、戦前から戦後にかけて『フランス通信』という書を10冊も著し、当時日本一の知仏派といわれた滝沢敬一(10回)は、その著書の中で、フェノロサが世界的な学者とも知らず、無邪気に授業を受けていた、と記しています。

このように、英語の授業を続けながら、一方では助手として手助けしてくれた平田喜一らとともに、能や漢詩なども研究しました。そして、1908年にロンドンで亡くなりましたが、その墓は故郷のアメリカではなく、滋賀県の三井寺につくられました。フェノロサ著『東亜美術史綱』昭14



講師にフェノロサの名前があります。明治31年 附属中学校一覽の一部「この「一覽」は現在の学校要覧のよつなものです。」